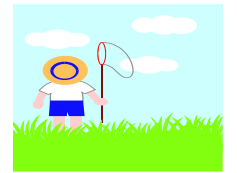


EGGPLANT

エッグプラント
那須ファミリー
ホームスクール
通信 No.13
2005.8.1



ホスピスで輝く

福音の力

先日、教会に下稲葉康之さんをお招きして、特別聖書講演会「いのち見つめて」を開催しました。

下稲葉さんは、現在、福岡県にある栄光病院副院長・ホスピス長であるお医者さんです。九州大学在学中にクリスチャンになられ、ドイツ留学の後に、しばらく、聖書の福音を伝える伝道者として教会を開拓しておられました。十三年後に、不思議な導きによって、今度は病院で「ホスピス長」として従事することになりました。

ホスピスというのは、末期患者（日本では、癌とエイズが原因の場合に限る）で、医療的な治療が不可能になった方々が入院します。「末期ゆえに生じる症状（患者や家族の身体的・精神的・社会的・宗教的・経済的な痛み）を軽減し、支え励ます」のが主な役割です。ホスピスに関してよく使われることばに「QOL」というものがあります。これは「いのちの質」と訳されています。ホスピスの目的の一つはこのQOLを高めることです。

多くのことを教えられましたが、その中の一つに緩和ケアの発達があります。末期の癌のイメージは

「痛み・苦しみ」ですが、現在、癌がもたらす痛みの九十く九十五％はコントロール可能だということです。「断末魔の叫び」とか「壮絶な痛み」などというものは過去のものだそうです。痛みはなくても麻薬投与でもうろうとしている状態というのでもかなり改善されており、医師の腕次第という部分が多くあるようです。最後まで意識を保つことは「いのちの質」を高める上で大切なことなのです。

「痛み」こそ、ホスピスに入院してくる患者たちが一番解決してほしいと願っているものですが、それがある程度解決すると、新たな問題を抱え込むといわれます。それは「死んだらどうなるのだろうか？自分の人生は何だったのだろうか？」というもので「魂の問題」です。まさに、人間の本质を問うものでしょう。下稲葉さんはこの問題に日々真剣に取り組んでおられます。平均在院期間が四十日ほどで、週に三、四人の人が亡くなっていくという壮絶な現場で繰り返しられる人間模様をつぶさに見ながら、これまでに三千人以上の方を看取ってこられました。その経験の中から語られる一言一言はとて一心に響きました。

死を前にして、この地上でなした偉業も蓄えた財産も何の役にも立ちません。深い関係だった友人や家族とも離れなければなりません。下稲葉さんは死

に対峙した患者さんたちの中に、次のような問題が見られると書いておられます。

赦されたいとの深刻な罪責感からの解放
限らない孤独感と疎外感からの解放
避けることのできない自分の死に脅かされている不安からの解放

そして、この絶望・危機を乗り越える力を与え、人間の根源的な問いに答えを与えるものこそ「聖書の語る福音」だと力説されました。

「すべての人は罪を犯したので神から栄誉を受けることができない…。」
「人間には一度死ぬことと、死後にさばき受けることが定まっている…。」

「神は実にそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じるものがひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

聖書は、魂は死後永遠に存在し続けると語ります。そして、福音を受け入れるものは恵みによって罪赦され、神の国に入ると約束されています。これが単なる作り話や、気休めの絵空事ではありません。真理であり、死を前にしたのものにも真の平安を与えることができるものであることを下稲葉さんは医療現場で体験されておられます。

（著書「癒し癒されて」

フォレストブックス 一三〇〇円）



「こんなことしました！」 行事報告

七月

五日 長居プール

十四日 ”

十六日 夏休み親子劇場

文楽「東海道中膝栗毛」

二十三日 親子でフアイト

生涯学習講座 料理教室

二十八日 スタンプラリー（献血ゼミナール・

なにわの海の時空館）



献血ゼミナールに参加して質問にマイクで答えるE

Mの読書コーナー

「飛ぶ教室」

この話は世界的な人気作家のケストナーが書いたとても有名な友情の物語です。

エーリヒ・ケストナー著

「飛ぶ教室」というのはクリスマスの時に主人公たちが行った劇の題名です。ユーモアがあり、友情や正義と勇気の大切さを教えてくれるもので、少年文学の傑作といわれています。この血も涙もある友情の物語をぜひ読んでください。

「はじめての文楽」

M

七月十八日、国立文楽劇場に「文楽 夏休み親子劇場」に行きました。今回は「東海道中膝栗毛」という江戸っ子の弥次郎兵衛と喜多八が東海道を旅する珍道中の物語を見ました。子供にはイヤホンガイドというものを貸してもらえて本編の解説をしてくれたりしてとても便利でした。文楽は今回初めて見るのでとてもワクワクしていました。文楽というのはもつと堅苦しいものだと思っていました。文楽というのを見てみると、人形なのにとってもよく人間の動きが表現されていて、さすが江戸時代のベストセラー小説とあって、とても面白く、弥次さんと喜多さんがとても愉快でずっと笑っぱなしでした。

「東海道中膝栗毛」の次は「文楽はおもしろい」という文楽の不思議やおもしろさをみんなにわかりやすく説明するコーナーがあつていろいろ文楽について教えてもらいました。その後「小鍛冶」という文楽を見ました。今回はとても勉強になり、おもしろかったです。この世界無形文化遺産に指定されている日本の宝にふれてみる事ができ、貴重な経験ができました。



「なにわの海の時空館」に行ったときの写真

「長居（ながい）プール」

E

ぼくは長いプールにお母さんたちと行ききました。ぼくは、スライダーというすべりだいを何と三十一回もりました。スライダーというすべりだいは、すごくこわくておもしろかったです。ふつうのすべりだいは、五回ぐらいしかのっていません。ふつうのすべりだいは、よっぽどはおもしろいです。プールでお兄ちゃんがかめこなってくれてあそびました。



編集後記

ホームスクールを始めて二回目の夏休みを迎え、はや四分の一が過ぎました。子どもたちはいろいろ計画を立てています。普段にまして、屋外での活動も充実しています。詳しくは九月号で。